

ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と集団構造

はじめに—問題と目的—

ゾロアスター教徒パーシーの現実の生活場面において、等級の異なる3種類の聖なる火 (Atas Bahram:Atas Adaran:Atas Dadgah) は宗教集団の最も重要な象徴として¹⁾、また死者と生者を結節する手段として²⁾、さらに「清浄 (Yaozda-)」を保つ儀礼的な手段として³⁾重要な意味をになっている。

そうした聖なる火はパーシー集団の中で具体的にはどのような人たちによって、どのように維持されているのか。聖なる火の維持の場面には、パーシーの集団の構造のどの側面がどのように関与し、また反映されているのか⁴⁾。

これらの問題点を明らかにすることは、ゾロアスター教文化における聖なる火の存在に関わる問題を明確にするだけでなく、象徴と社会の問題に接近する一方法でもある。

1. 資料と方法

問題の提起および考察は、調査地ナウサリ (Navsari ナウサリの概観については、『宗教研究』第57巻 257 第2輯 p.82参照) に限定して試みる。本稿で使用する資料の領域は、聖なる火の創設に関するグジャラティ (Gujarati) 文献、聖なる火に香木を加える儀礼 (マーチ Maci) に関する聖火殿の資料、パーシーの系譜史料 (DISA-POTHIとVANSHAVALICHOPDO)⁵⁾ とナムガラン (NAMGARAN)⁶⁾ ならびにフィールドワークによる資料である。

2. 聖なる火と集団構造

聖なる火が具体的にどのように維持されているかを取り出すために、これまで、聖火殿の構造⁷⁾、清浄儀礼⁸⁾を中心に記述してきた。本稿では、マーチに関する事実を系譜との関連で再構成し、聖なる火をとおしてゾロアスター教徒パーシーの集団構造の一側面を取り出していく。

そこで、はじめに聖なる火に香木を捧げる儀礼に具体的に言及する⁹⁾。つぎに、その儀礼をパーシーがどのように保持してきているかを系譜との関連で論述する。

1) 聖なる火に香木を捧げる儀礼

聖火殿におさめられているパーシーの聖なる火は、パーシーが絶えず香木を加えつづけることによって維持されてきている。香木は一定の形式にもとづいて聖火に捧げられる。具体的には、後述するマーチのように、ある特定の日に特定の個人や集団が香木を捧げる場合と、個人の人生儀礼などの不特定の場面で不特定のパーシーがそれを行う場合がある¹⁰⁾。また、香木を祭司が聖火に捧げる場合と平信徒がそ

れを行う場合とがある。

聖なる火に祭司が香木を捧げる儀礼そのものはブイ (bui) と呼ばれる。パフラヴィー語 (Pahlavi) buiは、アヴェスター語 (Avesta) baodhaにあたり、「香り」を意味する。パーシーは、この儀礼をブイ・デウィ (bui devi 文字どおりには、芳香を与えるの意味) と呼ぶ。第3等級の火であるアータシュ・ダードガーには、祭司だけでなく平信徒も香木を加えることができる。第2等級の火アータシュ・アーダラーンには、祭司だけが香木を加えることができる。これらの場合、祭司の資格が問題にされることはない。第1等級の火アータシュ・ベーラームに対しては、祭司だけが、しかもクープ (xub 10日にわたる清祓儀礼を経た翌日にヤスナの儀礼をおこなうことによって獲得される状態) を終えている祭司だけが、香木を捧げることができる。このクープの状態は、4日間だけ有効なので、それを過ぎると再びクープを獲得しなければならない¹¹⁾。

ブイの儀礼は、1日に5回、ガー (gah 1日を5刻限に分けるパーシーの時間単位) に行われる¹²⁾。ガーごとに、聖なる火への祈り (アータシュ・ニーアーシュ Atas Niyayes)¹³⁾が唱えられる。アータシュ・ベーラームには、それぞれのガーごとに、11回、9回、7回、7回、9回となっているが、アータシュ・アーダラーンとアータシュ・ダードガーには一度だけでよい。

ブイの儀礼は、アヴェスターの時代から継承されてきている太古的な清浄儀礼、祈り、時刻、方位感覚を保持してきている。この儀礼を行うことができるのは、クープという特別に清浄な (Yaozda-) 状態を儀礼によって獲得した祭司だけであるが、聖なる火の等級に応じてその内容が異なっている¹⁴⁾。つまり、等級の高い火であるアータシュ・ベーラームに香木を捧げる場合は、祭司は最も清浄な状態に自分を保っていなければならない。その場合には、香木はマーチと呼ばれる組み方に組み込まれて捧げられる。さらに、香木を捧げるガーにおける聖なる火への祈りの回数は、等級の低い火の場合には一度であるが、最も等級の高い火アータシュ・ベーラームに対してはそれぞれ11、9、7、7、9回唱えなければならない。

聖なる火に香木を捧げる儀礼は、パーシーにとっては、その行為によって「アフラー・マズダーを崇める」ことであり、その行為によって個人個人の「思想、言葉、行為を啓く」ことである¹⁵⁾。複雑で太古的な儀礼的慣習から構成されているこの儀礼を、パーシーが現実の生活場面でどのように位置づけているかを具体的に取り出すことは、ゾロアスター教徒にとって最も重要な象徴である聖なる火をパーシーがどのようにとらえているかを明らかにする一方法である。

2) マーチ

マーチ (maci)とは、パーシーが一年の日時・刻限を特定して、聖なる火に香木を捧げる行為である。このマーチは、個人、家族、親族、集団を単位として行われる。集団を単位とするマーチとは、「通り」、祭司集団、菜食主義者、パーシーコミュニティ全体を単位として行われることを意味している。ナオサリの聖なる火の中で最も等級が高いとされているアータシュ・ベーラームのマーチは、具体的には表

1のような形態をとっている¹⁶⁾。この表に記載されている内容は、ナウサリの祭司長ダストゥルジ・メヘルジ・ラーナ (Vada Dasturji Meherji Rana) の許可を得て、筆者が聖火殿の台帳に記載されてきている事項を筆写し、再構成したものである。台帳に記載された個人名については、後述するように、祭司系譜か平信徒か、生死、居住地などの事項を中心に個々に聴取調査を行い、その結果を再構成した¹⁷⁾。

マーチの基本的な構成は、個人、家族、親族または集団で担われている部分と、姓(家族)で担われている部分からなっている。後者の姓(家族)によるマーチは、前者の個人、家族、親族、集団マーチを補完する形でマーチを行っていくという役割を担っている。したがって、前者の家族と後者の姓(家族)は、台帳への表記上の形態は同じであるが、マーチを実行していく過程での役割が異なっているので、姓(家族)として区別した。マーチの一部分を図表で表すと、表1のような構成になる。表1の左端の30項目は、アフラー・マズダーを含めた神々の名称で、ゾロアスター暦において30日の日名となっている。上段の5項目は第1から第5刻限を表す。この2項目で囲まれた枠内の表記は、この特定の日に、聖なる火に香木を捧げる個人名、家族名、親族名あるいは集団名を表す。表1の右端の表記は、第1から第5刻限に、聖なる火に香木を捧げる姓(家族)名を表している。

表1

30日神名	第1刻限	第2刻限	第3刻限	第4刻限	第5刻限	第1刻限	第2刻限	第3刻限	第4刻限	第5刻限
神名	個人名	家族名	親族名	個人名	集団名	姓名	姓名	姓名	姓名	姓名
ティール	デサイ	デブ	ギャラ	アンティア	ドーディ	カンガ	マサーニ	メータ	ホムジ	ダブー
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

総数1825のマーチを、表1のように再構成し、それらを1月から12月まで集計し分析を試みた(以下、表に再構成したマーチ資料と表記)。(1)から(4)に提示した内容は、マーチを材料領域として、聖なる火アータシュ・ベーラームとの関連でパーシーの集団構造を分析した結果である。

(1) 姓

表1が示すように、聖なる火は日時・刻限を特定して、個人、家族、親族、集団あるいは姓(家族)を単位として香木が捧げられることによって保持されている。そこで、姓(家族)によるマーチを除いて、マーチのすべての事例を姓で類別してゆくと、238の姓を抽出することができる。238姓の分布の様態は、1事例81姓、2事例45姓、3事例18姓、4事例19姓、5事例6姓、6事例6姓、7事例8姓、8事例4姓、9事例8姓、10事例以上37姓となっている。ここで、10事例以上の分布を示す姓を具体的に示すと、表2ようになる。

表2

姓 名	事例数	姓の重なるの総数	姓の重なるの人数	祭司系譜	死者供養	所在地 ノウサリ
アマリア (Amaria)	15	7	2	0	1	2
アンティア (Antia)	63	42	11	11	9	10
アスンダリア (Asundaria)	11	2	1	0	0	ムンバイ 1
バジャン (Bajan)	27	18	6	6	5	1
バラポリア (Balaporia)	21	21	2	0	0	ムンバイ 1
バリア (Baria)	13	11	3	0	0	2
バットリワラ (Batliwala)	11	8	4	0	1	0
ベドワール (Bhedwar)	15	7	2	2	1	ムンバイ 3
ボート (Bhoot)	28	3	2	0	15	2
ブハリワラ (Buhariwala)	19	4	2	0	1	23
カサッティ (Cassattee)	10	0	0	0	0	ムンバイ 5
チニワラ (Chiniwala)	12	7	2	0	0	2
ダブー (Daboo)	13	5	1	1	1	スーラト 1
ダダチャンジ (Dadachanji)	18	10	4	4	4	1
ダルワラ (Daruwala)	19	7	3	0	2	4
ダストゥール (Dastur)	79	44	15	15	13	3
デブー (Deboo)	85	43	13	0	8	13
デサイ (Desai)	145	103	22	22	16	ムンバイ 2
ファニバンダール (Fanibandar)	21	16	3	0	3	3
ホディワラ (Hodiwala)	18	9	3	0	3	3
ホームジ (Homji)	51	43	10	10	4	6
カカリヤ (Kakalia)	34	16	5	5	2	ムンバイ 4
カンガ (Kanga)	109	81	13	13	10	5
カルカリヤ (Karkaria)	21	13	5	5	3	12
カサッド (Kasad)	12	2	1	0	1	ムンバイ 1
カトラック (Katrak)	14	3	1	1	1	4
コラー (Kolah)	23	18	5	0	1	アーメドナ 1
コトワル (Kotwal)	76	49	10	10	4	1
クタール (Kutar)	19	6	3	3	1	ムンバイ 1
マダン (Madan)	21	2	1	1	0	3
マサーニ (Masani)	21	12	2	2	2	1
メータ (Mehta)	29	14	5	0	2	2
ムーラ (Mullah)	14	4	2	2	2	3
パテル (Patel)	30	16	5	0	1	ムンバイ 2
スッカドワラ (Sukhadwala)	15	11	2	0	0	2
タンボリ (Tamboli)	21	11	4	0	1	ムンバイ 1
ヴァジフダール (Vajifdar)	21	9	4	4	1	ムンバイ 2

例えば、2番目のアンティアを例にして、表2に表記された内容の説明を行う。この姓がマーチを行った事例の総数が63である。これらの63事例は、それぞれ異なる63名の個人によって行われているのではない。同一人物が2回以上マーチを行っている事実があり、そのような形をとったマーチの事例を合計すると42になる。その42事例は、11名のアンティアによって分担されている。11名のアンティアのうち、11名全員が祭司系譜に属している。死者の霊の供養との関連でマーチを行ったのが11名中9名で、ナウサリ在住のアンティアは10名、残りの1名がムンバイ在住である。

表2にもとづくくと、238姓のなかの37姓（15%）が、1174事例のマーチを引き受けながら、聖なる火を維持している。マーチの事例の総数が1825であり、そのうち95事例を集団マーチがしめるので、1730事例が個人マーチである。この1730事例のなかの約68%に相当する1174事例を、表2が示す37姓が分担しているのである。換言すると、15%のパーシーが、アータシュ・ベーラームのマーチの6割8分を行ってきているのである。集団全体が比較的均一に関与するというよりも、むしろ一部の姓が他の姓よりも強く関与する形をとりながら、パーシーは聖なる火アータシュ・ベーラームを保持してきている。

（2）信託 (Trust) と死者供養

マーチの記録を追跡していくと、個人や家族を単位としてだけでなく、親族やその他を単位とするトラスト(Trust 信託)によって香木が捧げられている(95事例)。トラストは83事例が家族・親族、7事例が「通り」、3事例がバガリアー (Bhagaria) 祭司集団、1事例が菜食主義者、1事例がパーシーコミュニティ全体 (Fallani maci) を単位としている。

この場面での信託は、パーシーによってニバウ (nibhav) と呼ばれているが、これはサーサーン朝時代の慣習法典 (MHD. Madigan i Hazar Dadistan) の yazisin nihadag (死者供養のための寄進あるいは信託) に相当すると考えられる。これは古いゾロアスター教的慣行である。また、信託が「死者の魂の供養」のために組まれる事実は、MHD. 特にMHD. 34の「死者の魂の供養 (ruwan yazisin ray)」の残存と考えられる¹⁸⁾。

パーシーの死者供養は、死者の名前を記念する形、死者の名前を記憶する形で行われていく。死者の名前を確実に残す手段として、①「故人の霊のために」、聖火殿、鳥葬の塔をはじめその他の社会施設を創設していく。ナオサリにおいては、9つの聖なる火のうち8つがその形式をふんでいる。パーシー全体については、8つのアータシュ・ベーラームの7つがそうであるし、133の聖なる火ならびに聖火殿のうち118(約9割)が故人の霊のために建てられている。②クトウンブ (Kutumb 父系血縁集団) に名前を残す、つまり、出自系譜の中に名前を記録し残す。パーシーにおいては、死者の記憶は『家系図-I』¹⁹⁾のような形で、クトウンブ(父系血縁集団)の規模で死者を記憶する仕方と、『家系図-II』²⁰⁾のような形でクトウンブの下位集団の規模で死者を記憶する仕方が存在する。前者は男子名だけを記憶し、後者は男女名を記憶する。毎年、「死者を供養し祀る日」には、聖火殿で行われる

死者供養の儀礼の中で、『家系図－Ⅱ』に記録された名前を祭司が声に出して全て呼び上げる。クトゥンプの規模の場合は一時間以上を要するのが通例である²¹⁾。これはパーシーが広範な時間幅にわたって名前を記憶しようとする行為であり、そこには男子名を記憶する規模と女子名を記憶する規模が異なりを示しながら並存している。

こうした仕方に加えて、パーシーは聖なる火に香木を捧げる行為によっても死者を供養していこうとする。表に再構成したマーチ資料の中の個人マーチに関して、そこに名前が記載された個人について聴取調査を行うと、921事例（全体の約53%）が死者である。個人の断面でも、信託マーチという集団の断面でも、マーチは死者の供養と深く関わりながら行われてきているのである。

ここで、83事例の信託を具体的に分析すると、31の姓が家族・親族マーチを担っているが、そのうち23姓が1回、2姓が2回、1姓が3回、1姓が5回、1姓が6回、1姓が9回、1姓が11回、1姓が22回のマーチを引き受けている。ここでも、3姓（Desai, Dordi, Choksey）で約半分の集団マーチを分担する偏りが見られる。3姓のうちで、ドーディ（Dordi）とチョコスイー（Choksey）は、集団マーチだけで聖なる火の維持に関与している。このことは、5回担っているババ（Bhabha）と、6回担っているギャラ（Gyara）についても同様である。個人マーチだけでなく、集団マーチである信託についても、一部の特定の姓が他の姓よりも強く関与する形がとられてきているのである。

（3）女子名

表に再構成したマーチ資料には、女性の名前が313事例出てくる。この313事例について、それぞれ聴取調査を行った結果は、未婚一人暮らしが81事例、既婚・子供なしが53事例、既婚・息子なし・娘ありが29事例である。これらの女性は、パーシーにおいては、後継者がいないと位置づけられている立場にある女性である。アータシュ・ベールームのマーチは、そうした社会的立場にある女子のためにも行われてきている。

パーシーが高く価値づける系譜資料である『家系図－Ⅰ』には女子名は記録されない。また、死者供養のための養取慣行（Palak）の場面でも、女子に関わる事例は殆ど観察されない²²⁾。しかし、個人マーチや、財物の一部を信託にし、そこに相続継承の観念が入ってくる信託マーチの場面では一既に記述したように、ここは死者の魂の供養の場面でもあるのだが、女子がそれらの信託を起こすこともあるし、女子（妻や娘）がそれらを相続することもある。

女子が信託を起こす場合は、遺言の形式をとることもできる。信託の相続継承は、①自分の家族の線をたどる形、②被信託人の線をたどる形、がある。具体的には、①個人あるいは集団が財産の一部を遺言などで信託にし、その利子で聖なる火に香木を加えつづける形、②既存の信託に資金や土地を委託し、そこから生じる利子や上納で聖なる火に香木を加えていく形とがある²³⁾。パーシーはこれらの信託を組むことによって、死後「魂の供養」をしてもらえない立場にある人物のため、に聖火殿において聖火に香木を捧げていく。自分自身の魂だけでなく他の人々の魂の供養

も含めて信託を組む思考や、信託の利子を使用して供養を行っていく等の事実は、サーサーン朝時代の慣行がパーシーによって保持されてきていると考えるべきである²⁴⁾。

ナオサリでは、ドジバイ・コトワルの遺言によって、1923年に聖なる火（ダードガー dadgah）も創設され、ドシバイ自身と彼女の両親のために、年々アフアルガン・バージ（Afrinagan Baj）²⁵⁾とムクタード（Muktad）²⁶⁾が行われてきている。女子が聖なる火を創設する事実もサーサーン朝時代の慣習法典の中に散見する（MHD. 39. 5-7:18）。

このように系譜資料の『家系図－I』および養取慣行では社会的に劣位に置かれている女子が、マーチならびに聖なる火の創設や維持の場面では、それらの領域に比して比較的高い位置を占めている。しかもその事実はサーサーン朝時代からの古い慣行と考えられる。

（4）地域性

アートシュ・ベーラームのマーチは、その1404事例（約77%）がナオサリ在住のパーシーによって行われてきている。ナウサリの聖なる火アートシュ・ベーラームを維持する主体はナオサリを中心にしていて、ムンバイ（311事例）やその他の地域（56事例）への広がりには示さない。パーシーの聖なる火は、極度に強い地域性と集団性のなかで保持されてきている。

パーシーの聖なる火は、それらの等級にかかわらず、個人によって創設されてきている。個人が活着している間にそれが行われることもあるし（ムンバイのダディバイ・アートシュ・ベーラームやスラートのモディ・ヴァキル・アートシュ・ベーラームなど）、個人の遺言に基づいて後継者がそれを行うこともある（ムンバイのワディア・バナジ・アートシュ・ベーラームなど）。これらの行為は、男子でも女子でも行うことができる。MHD. 27:15-16には、一人の女性が聖なる火を創設し、遺言を残さずに死んだので、聖なる火が彼女の夫によって継承される事例も記録されている。また、養子も聖なる火の信託（sardarih）を継承することができた（MHD. 29:9）²⁷⁾。個人によって創設されて聖なる火は、いったん聖火殿の中におさめられると、永続的な独自性を与えられ、他の火と混ぜ合わされたり、その聖なる火から別の火が分かれることもありえない。このように、聖なる火それ自身が特有の独自性をもつこととも深く関連するのであろうが、ナウサリの聖なる火は、パーシーのコミュニティーを広く交錯する形では保持されてきていないのである。このような思考と慣行は、サーサーン朝時代から現代まで保持されてきており、このことが聖なる火の地域性と関連していると考えられる。

3) マーチと系譜

マーチを、祭司系譜のパーシー（Mobed）か平信徒（Behdin）かで類別すると、前者による事例（951事例 52%）が、後者による事例（873事例 48%）を78事例上回っている。全体の半分ずつを、両者で分担し合ってきているといえよう。そこで、祭司系譜のパーシーと平信徒の聖なる火への具体的な関わりの度合いを取り出すた

めに、姓の重なりを再考する。姓の重なり的事例総数788を、それを担った人数219人で割ると、平均値は3.59事例となる。ここで、祭司系譜と平信徒の間で、平均値の比較を行うと、祭司系譜が3.98事例、平信徒が2.88事例となる。姓の重なりを保ちながら聖なる火を維持する傾向は、祭司系譜に属するパーシーの方が平信徒よりもがわずかながら高いことが指摘できる。言い換えると、聖なる火とより強く関わろうとする態度は、祭司系譜に属するパーシーのなかに存在するのである。

ところで、表に再構成したマーチ資料に記載された姓（家族）に関して数的な処理を行うと、カンガ（Kanga）とマサーニ（Masani）の頻出の度合いが極めて高い。これらの2姓の全体に対する比率を各月にわたって具体的に示すと、それぞれ1月25%・44%（69%）、2月30%・54%（84%）、3月20%・43%（63%）、4月26%・35%（61%）、5月17%・30%（47%）、6月17%・42%（59%）、7月19%・40%（59%）、8月35%・37%（72%）、9月16%・47%（63%）、10月17%・44%（61%）、11月21%・50%（71%）、12月6%・32%（38%）となっている。5月47%と12月38%が比較的低い割合を示しているが、その他の月は6割以上の数値を示しており、両者を合わせた各月の平均値は62%となっている。

この結果は、姓（家族）マーチの場合も、個人マーチならびに信託マーチの場合と同様に、ある特定の家族が主体となっている事実を示している。

そこで、カンガ（Kanga）とマサーニ（Masani）をパーシーの系譜史料『家系図－I』で遡及していくと、さらにそこに新しい事実が発見される。すなわち、次に示すように、カンガに関してはカーカー・ダンパール（Kaka Dhanpal）、マサーニに関してはチャンドナー・ファレドゥーン（Chanda Faredun）と呼ばれる出自集団の始祖にぶつかることである²⁸⁾。言い換えると、この場面では、聖なる火は、カーカー・ダンパールとチャンドナー・ファレドゥーンと呼ばれる出自集団で維持されており、カーカー・パーラン（Kaka Pahlān）、アーシャー・ファレドゥーン（Asha Faredun）、マーヒヤール・ファレドゥーン（Mahyar Faredun）と称される出自集団によっては維持されてはいないのである。

ところで、祭司系譜に属するパーシーを系譜史料『家系図－I』で追跡していくと、そこに数本の出自の流れが存在していることが取り出せる。それらは、バガリアー（Bhagarīa）、サンジャーナー（Sanjana）、ゴダーワラー（Godavra）、バルチャー（Bharucha）、カムバータ（Khambata）であるが²⁹⁾、ここではナウサリとの関連で重要なバガリアーだけを取り上げる。

バガリアーは、（1）カーカー・パーラン（①シャプール・シャリアール②ラームヤール③オールマズドヤール④モーバッド⑤ザルトーシュト⑥カームディーン⑦モーバッド⑧カムディーン⑨ラーナー⑩チャンドナー⑪アーンナー⑫パーラン）、（2）カーカー・ダンパール（①シャプール・シャリアール②ラームヤール③オールマズドヤール④モーバッド⑤ザルトーシュト⑥カームディーン⑦モーバッド⑧ラクミーダール⑨バーマー⑩ラクミーダール⑪ダンパール⑫カーカー）、（3）アーシャー・ファレドゥーン（①シャプール・シャリアール②ダヴァル③ネーリョサング④モーバッド⑤クシュマスター⑥クジャスター⑦バマンヤール⑧クールシェード⑨バマンヤール⑩ホーム⑪ファレドゥーン⑫アーシャー）、（4）マーヒヤ

ール・ファレドゥーン（（3）の12代目アーシャの部分にマーヒヤールが入る）、（5）チャーンダー・ファレドゥーン（（3）（4）の12代目の部分にチャーンダが入る）の5ポール（Guj. pol. 路地の意）から構成されてきた³⁰⁾ところで、マーチは、既述したように、基本的には、個人、家族、親族または集団で担われている部分と、姓（家族）で担われている部分から構成されている。ここで前述の表2の個人、家族、親族または集団で担われている部分に注目し、それらを『家系図-I』との関連で考察すると、そこには別の事実が発見される。

表2で言及したように、アンティア（Antia 63事例）、ダストゥール（Dastur 79事例）、デブー（Deboo 85事例）、デサイ（Desai 145事例）、ホムジ（Homji 51事例）、カンガ（Kanga 109事例）、コトワル（Kotwal 76事例）が聖なる火の維持に特に強く関わっている。これらの8姓で608事例を引き受け、全体の約52%をしめている。これらの姓は、1月から12月まで、すべての月に分布しながら、ある特定の月に極端な偏りを示すことなくマーチを行っている。そこで、これらの姓の系譜を『家系図-I』にもとづいて追跡していくと、つぎに示すように、アンティアがマーヒヤール・ファレドゥーンに、ダストゥールがカーカー・パーラン、デサイ、コトワルがアーシャー・ファレドゥーン、カンガがカーカー・ダンパールに所属していることが取り出せる。この部分では、特に、カーカー・ダンパール（ベトワール・カンガ・マダン・ムーラ・ヴァジフダール 総計180事例 24%）カーカー・パーラン（ダストゥール・カカリア 総計113事例 18%）とアーシャー・ファレドゥーン（ダーダーチャレンジ・デサイ・カトラック・コトワル 総計253事例 33%）が中心となってマーチを行い、聖なる火を維持しているのである。

さらに、これらの姓を『家系図-I』にもとづいて、バガリアーか非バガリアーかで区別していくと、デブーを除くすべてがバガリアーであることが追跡できる。表2の37姓のなかの半数18が祭司系譜に属していて、全体の約66%を分担しているが、そのうちの18姓すべてがバガリアー祭司である。このことは、既に取り上げた信託マーチについても同じである。全体の半数にあたる47の信託マーチを、祭司系譜のパーシーが担っているが、すべてがバガリアー祭司系譜である。ここでは、アーシャー・ファレドゥーン（デサイ・カトラック・コトワル・モーディ・ランジ・サシュトリ 総計19事例 40%）、カーカー・パーラン（ドーディ・ダストゥール 総計13事例 28%）、チャーンダ・ファレドゥーン（バジャン・カムス・クタール・パウリ・セスナ 総計7事例 15%）が中心となっており、マーヒヤール・ファレドゥーン、カーカー・ダンパールはそれぞれ1事例ずつしか関わっていない。

これらの事実は、ナオサリにおいて最も等級の高いアータシュ・ベーラームは、祭司系譜に属する集団、特に、バガリアー祭司集団が中心となって、個人、家族、親族または集団マーチと姓（家族）マーチをそれぞれ分担することによって維持されていることを示している。具体的には、前者をアーシャー・ファレドゥーン、カーカー・パーラン、カーカー・ダンパールが、後者をカーカー・ダンパール、チャーンダー・ファレドゥーンが担っている。聖なる火に香木を加えることができるのは祭司であるが、このこととは別の断面においても、聖なる火は祭司系譜に属するパーシーによるマーチによって保持されてきているのである。

おわりに

パーシーが聖なる火に香木を捧げる行為を考察すると、パーシーの聖なる火は、「アプラー・マズダーの子」であり (Atas Niyaes:4-8;8;10;12;18)、パーシーは「(聖なる) 火をとおして、アプラー・マズダーを崇める」。聖なる火は、「供え物と祈り」をもって近づくべき「永遠の存在」であり (AN:7-8;13-15)、供え物をもってこれに近づくものには、「生命、知恵、子孫、活動力、勇気」 (AN:10-11) や「善き報いと魂の永き平静」 (AN:13) を恵む。

パーシーの聖なる火は、個人や家族によって創設され、聖別され、聖火殿に保持され、一般の火とは区別されてきた。パーシーが聖なる火を創設する行為は、個人や家族の名前が記憶され、また、死者の魂が供養されることでもある。この思考は、パーシーが祭司をとおして聖なる火に香木を捧げつづける行為の動因ともなっている。パーシーは、個人、家族、集団を単位にして、この行為を持続し、場合によっては信託を組む形でも継続しようとする。したがって、この聖なる火に香木を捧げ加える行為は、当事者にとっては相続継承の対象にさえなるほど重要な意味をもっている。

この行為は、ナウサリのアータシュ・ベーラームに関しては、祭司系譜に属するパーシーが中心となって行われてきている。個人の断面でも集団の断面でも、祭司系譜に属する特定の家族(姓)が、また、祭司系譜の中でもバガリアーと呼ばれる特定の流れに属する集団が、アータシュ・ベーラームに香木を捧げることによって聖なる火は永続的に燃えつづけてきているのである。

注

- 1) 中別府温和 「ゾロアスター教における聖なる火—ナオサリの事例を中心として—」 (『哲学年報』第42輯 1983年) PP. 29-52
- 2) 中別府温和 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」 (『西日本宗教学雑誌』第18号 1996年) PP. 13-25
- 3) 中別府温和 「ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼—ナオサリの事例を中心に—」 (『哲学年報』第43輯 1984年) PP. 91-109
- 4) 聖なる火の維持に関しては、拙論 「インドにおけるゾロアスター教の存続と変容」 (『宗教間の協調と葛藤』 佼成出版社 1989年) pp. 229-246 において、既に若干の分析を試みた。当該論文の内容の一部と、本稿の内容と重複する箇所があることをここで予め指摘しておきたい。
- 5) DISA-POTHIは、1966年までに及ぶデサイ・クトゥンプ (Desai Kutumb) とダストゥール・クトゥンプ (Dastur Kutumb) の系譜を記録したグジャラーティ史料である。この史料は、個人の名前、没年月日、祭司の資格を獲得するための儀礼 (Navar) の終了年、個人に関する説明 (例えば、妻がどのクトゥンプの出身であるか、あだ名、死亡原因など) を記録している。VANSAVALICHOPDOは、1本の樹と枝葉を描き、その幹、枝、葉の順に系譜下りながら一人一人の個人

名を具体的に記録しているグジャラーティ史料である。パーシーにおいては、これらは一般的な慣行である。本稿では、これらの系譜史料を、便宜的に『家系図－Ⅰ』と称したい。詳細は、拙論「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」（『西日本宗教学雑誌』第17号 1995年）P. 13を参照。

- 6) ナームガラン (NAMGARAN) は各家が保持している人名帳で、ある特定の範囲に限定して人名が記載されており、それらが祭祀の場面で呼び起こされていく。本稿では、これらの系譜史料を、便宜的に『家系図－Ⅱ』と称したい。詳細は、拙論「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」（『西日本宗教学雑誌』第18号 1996年）P. 25を参照。ナームガランには種々の形態があり、この史料の検討は、ゾロアスター教徒パーシーの思考様式、行動様式その他を抽出するために非常に重要であるが、それらに関する考察は別稿に譲りたい。
- 7) 中別府温和 「ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼－ナオサリの事例を中心に－」（『哲学年報』第43輯 1984年）PP. 91-94を参照。
- 8) 注 7)、pp. 94-99 ならびに、拙論「ゾロアスター教における死体悪魔 (druks yananus) について」（『哲学年報』第44輯 1985年）PP. 21-37を参照。
- 9) Modi, J. J., *The religious ceremonies and customs of the Parsis, Bombay 1986 (reprint) pp. 233-239*. 本稿に記載した内容は、現在ナウサリで行われているブイの儀礼であるDr. Dastur Firoze M. Kotwalの指導のもとに、内容の確認と記述を行った。
- 10) 中別府温和 「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」（『宗教研究』257号、1983年）pp. 89-90を参照。
- 11) クーブには（大）クーブと小クーブがあり、その性質は異なるが、それらについては、拙論「ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼－ナオサリの事例を中心に－」（『哲学年報』第43輯、1984年）P. 7 注 17)、 ならびに、Dastur Firoze M. Kotwal And James W. Boyd., *A Persian Offering The Yasna: A Zoroastrian High Liturgy*. Paris. 1991 p. 63 n. 6 を参照。
- 12) ブイの儀礼およびガーについては、拙論「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」（『宗教研究』257号、1983年）、pp. 97-99 注 6) P. 84を参照。
- 13) アータシュ・ニーアーシュについては、拙論「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」（『宗教研究』257号、1983年）P. 99 注 8) を参照。 athro ahurahe mazdao puthra tava atarsh puthra ahurahe mazdao khshnaothra（「聖なる火、アフラ・マズダーの子、汝聖なる火の喜びのために、聖なる火、アフラ・マズダーの子」）という祈りが捧げられる場合もある。
- 14) Yaozda-の概念に関しては、拙論「ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼－ナオサリの事例を中心に－」（『哲学年報』第43輯、1984年）PP. 99-105、 ならびに Mary Boyce., *A Persian Stronghold Of Zoroastrianism*. Oxford. 1977、pp. 92-138 を参照。
- 15) このことに関しは、拙論「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」（『宗教研究』257号、1983年、pp. 97-99 注 6) ブイの儀礼を参照。

- 16) 事実上は、大量の資料になるが、紙数の関係上割愛し、その一部だけを示した。
- 17) 筆者によって再構成された資料も大部に及ぶので、ここでは、紙数の都合上注16)と同様に割愛せざるをえなかった。
- 18) 中別府温和「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」(『西日本宗教学雑誌』第18号、1996年)、PP. 18-19を参照。
- 19) 本稿 注 5) を参照。
- 20) 本稿 注 6) を参照。
- 21) 中別府温和「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」(『西日本宗教学雑誌』第18号、1996年)、PP. 18-19を参照。
- 22) 中別府温和 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」(『西日本宗教学雑誌』第17号、1995年)、p. 8 および「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」(『西日本宗教学雑誌』第18号、1996年)、PP. 14-15を参照。
- 23) ①既存の信託に依頼する事例としては、ピロジバイ・ダンジバイ・ペスタンジ・モディ (Pirojbhai Dhanjbhai Pestonji Modi) がアータシュ・ベーラームとワディ・ダリ・メールにおけるマーチを委託している。②被信託人に依頼する事例としては、マネクバイ・フラムジ・クルシェドジ・ドーディ (Manekbai Framji Khurshedji Dorji) の魂の供養のために、アータシュ・ベーラーム・ニバウ (Atas Bahram Nibhav) が組まれている。③個人が自分の土地の一部を信託にする事例として、ホルムスジ・カワスジ・ゴットラ (Hormusji Cowasji Gotla) 家のバージ・ロージガー (Baj Rojgar) とムクタード (Muktad) の信託がある。ここでは、姉妹の息子がホルムスジ・ゴットラの姓名を継承することを条件に、信託権が譲渡されることと、その信託権は姉妹の息子の長男へと継承されることが遺言されている。その場合に、「アルデシールに息子がいないときは、年1500ルピーは娘のアワバイ (Awabai) に与えられ、アワバイの死後はその長男に、息子がいないときは長女に与えらる。その場合、全ての人物はアルデシールの子孫となるのでゴットラを姓としなければならない。もし、年1500ルピーを受け取る人物が女子の場合は、彼女の夫がゴットラの姓を名乗らねばならない。」とされている。詳しくは、拙論、「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」(『西日本宗教学雑誌』第18号、1996年)、PP. 16-19を参照。
- 24) 中別府温和 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」(『西日本宗教学雑誌』第18号、1996年)、PP. 18-19を参照。
- 25) 果物、花、乳、水からなる供え物 (miyazd) を用意して、天使や死者の靈魂 (fravasi) を迎える儀礼。1年の終わりの5日間、1年の始めの3日間、ガーハンバー (Gahanbar) と呼ばれる年6度の共同祝祭などの場面でも行われる。
- 26) ゾロアスター教暦の10日間に、フラワシ (fravasi 靈魂) のために行われる儀礼。各家ごとにフラワシが迎えられ祀られる。
- 27) Mary Boyce., On The Sacred Fires Of The Zoroastrians. BSOAS X X X II, 1968. pp. 52-68を参照。

- 28) 紙数の都合で、原史料の掲載は割愛せざるをえなかった。
- 29) オールマズドヤール・ラームヤールの孫ザルトーシュト・モーバッドは、カームディーンとモーバッドをともに、サンジャーナから北へ移動し、1275A. C. 頃にナウサリに定着した。。ザルトーシュトの弟バーラーム・モーバッドは、サンジャーナからバルチ (Bharuch あるいはブローチ Broach) に移動し、バルチャー祭司 (Bharucha priests) の始祖となった。ザルトーシュトの孫パーラーン・モーバッドはスーラト (Surat) に移動し、ゴダーワラー祭司 (Godavra priests) の始祖になった。サンジャーナー (Sanjana) 祭司の一系譜は、①シャプール・シャリアールダヴァル、③ネーリョサング、④モーバッド、⑤クシュマスター、⑥クジャスター、⑦バマンヤール、⑧クールシェード、⑨バーマンヤール、⑩ホールマズドヤール⑪ダンパール、⑫ナーゴージュ、⑬カームディーン、⑭クルシェッド、⑮アースディーン、⑯チャーイヤーン、⑰カームディーン、⑱アーシャー、⑲ホーシャング、⑳クルシェッド、(21)バイジー、(22)ジャーマスプとなっている。
- 30) 14世紀末、ナウサリの人口が増大したので、カームディーン・ザルトーシュトの後継者はサンジャーナからホーム・バーマンヤールをサンジャーナから招いた。ホーム・バーマンヤールは、一人息子のファレドゥーンとともに、ナウサリに来てカームディーン・ザルトーシュトの後継者たちを援助していたが、依然としてサンジャーナのアータシュ・ベーラームの管理を続けていた。そのうち、サンジャーナ在住の、ホーム・バーマンヤールの兄弟のオールマズドヤール・バーマンヤールが、ホーム・バーマンヤール親子がサンジャーナとナウサリの二ヶ所で報酬を得ることに異議を申し立て、ファレドゥーンと二人の息子 (アーシャーとマヒヤール) にナウサリかサンジャーナのいずれか一方で働くように勧告した。ファレドゥーンと二人の息子は、パーラン・アーンナーとカーカー・ダンパールによって継承されてきているモーバッド・カームディーンの後継者たちが、宗教儀礼の報酬を彼らとファレドゥーンの3人の息子たちとの間で、将来にわたって永続的に均分することに合意すれば、サンジャーナのアータシュ・ベーラームの管理する権利を放棄しナウサリで仕事を続ける旨を伝えた。パーラン・アーンナーとカーカー・ダンパールの後継者たちは、この申し出に同意し、ファレドゥーン・ホームの3人の息子たちは彼らの同資格同労者となり、以来、バガリアー (Bhagaria) あるいはバガサース (Bhagarsath 分担者) と呼ばれるようになった。